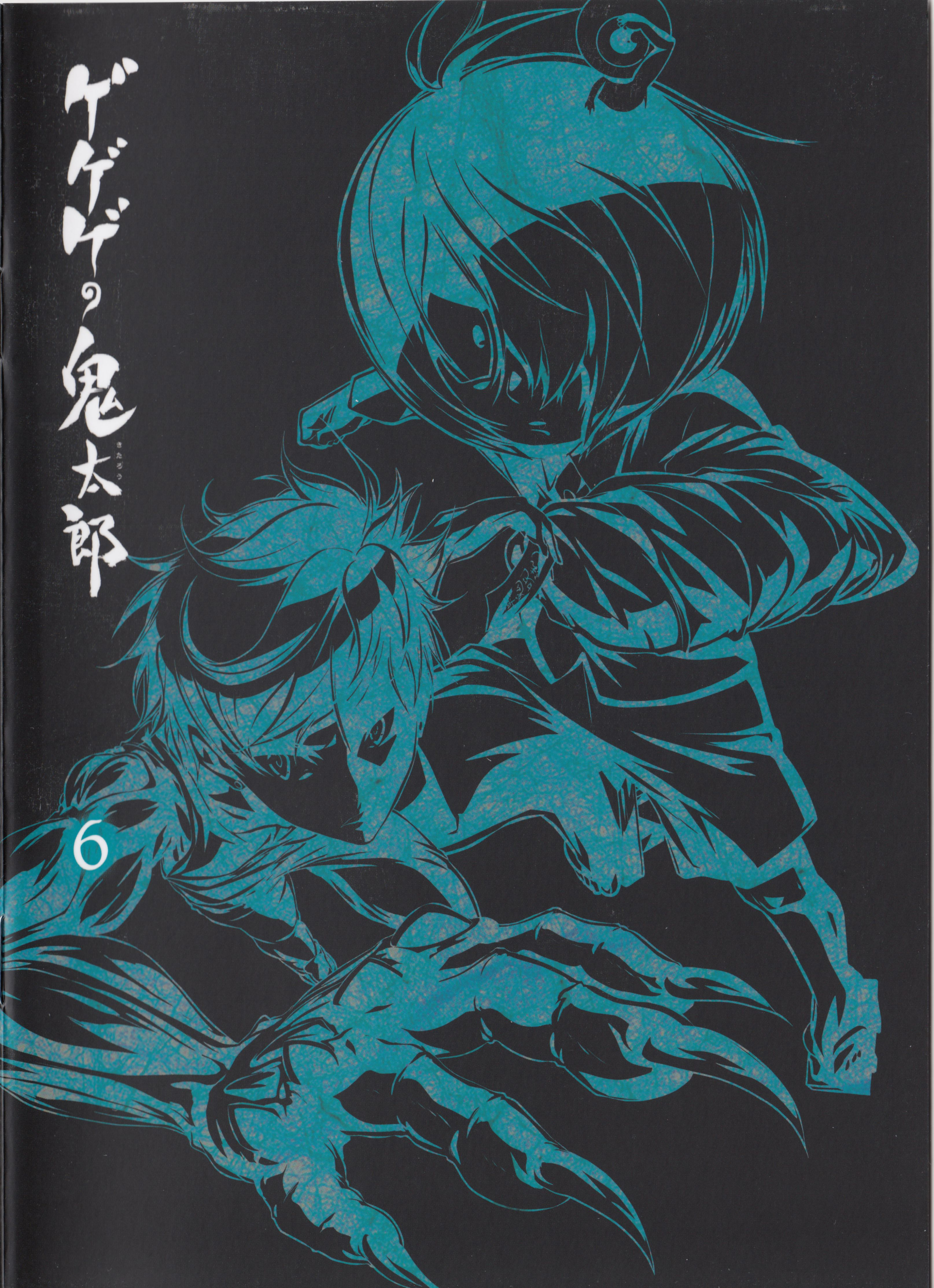
ゲゲゲの鬼太郎

6



DISC





第 63 話

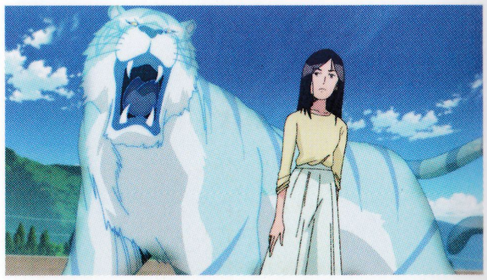
恋の七夕妖怪花

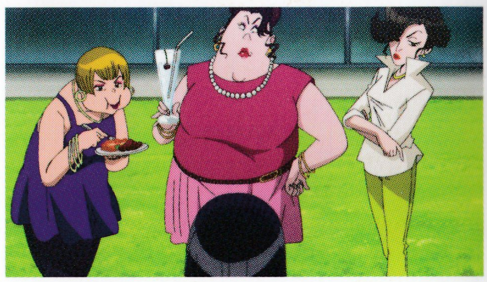
七夕の日に、ねずみ男からの手紙を受けて笹林を訪れた鬼太郎たち。しかしある少女に突然襲われ笹林から出て行くように警告を受ける。一方、鬼太郎たちとはぐれ怪我を負ったぬりかべにも襲いかかろうとする彼女だったが……!?

演出：前島健一　脚本：井上亜樹子　作画監督：鈴木伸一　美術：加藤 恵

第 64 話

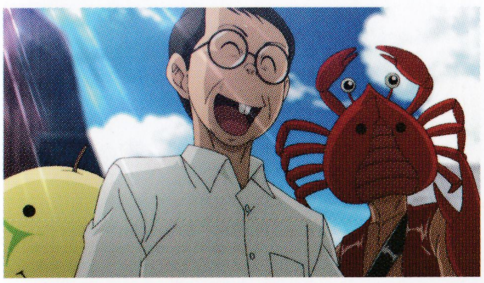
水虎が映す心の闇





夫が勤めていた会社の倒産をきっかけに、新しい街に越してきた翔子と家族。しかしその街は鬼久保食品の社長一家が牛耳っており、いつしか家庭からは笑顔が消えていた。そんな状況へ憎悪を募らせた翔子の絶叫に、呼応するようにして水虎が姿を現す。

演出：角銅博之　脚本：長谷川圭一　作画監督：小泉 昇　美術：加藤 恵





第 65 話

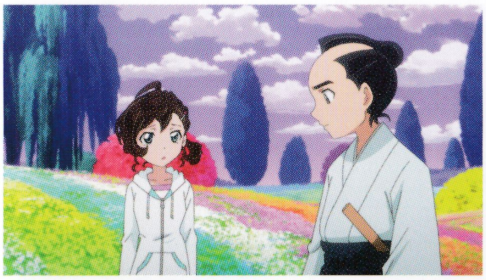
建国!?
魔猫の大鳥取帝国

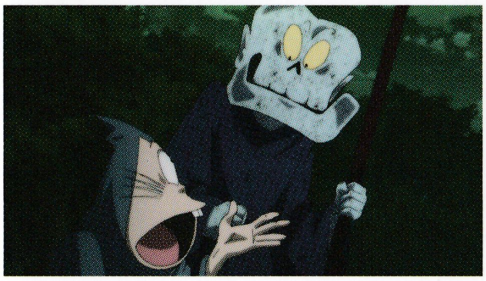
久しぶりに鳥取を訪れたまなと鬼太郎たちは、鳥取県が大鳥取帝国として独立したという衝撃の事実を知る。更には、まなのおじである庄司から知事が偽物だという話を聞く。そんな鬼太郎たちに知事の魔の手が及び……!?

演出：上田芳裕　絵コンテ：小川孝治　脚本：井上亜樹子
作画監督：真波三郎　美術：加藤 恵

第 66 話

死神と境港(さかいみなと)の隠れ里

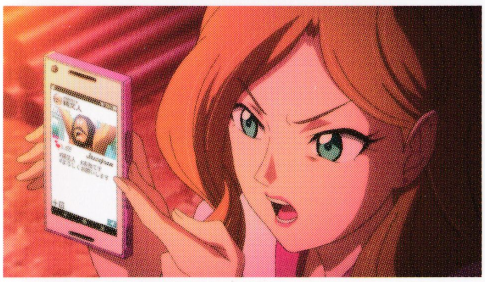




境港のみなと大漁祭りを楽しむ鬼太郎たち。ところがまなは奇妙な声に呼ばれ、美しい花が咲き乱れる場所に迷い込んでしまった。そこで出会った少年はここから帰ることはできないとまなに告げる。果たして鬼太郎たちはまなを見つけ出せるのか。

演出：岩井隆央　絵コンテ：八島善孝　脚本：長谷川圭一
作画監督：八島善孝　美術：加藤 恵





第 67 話

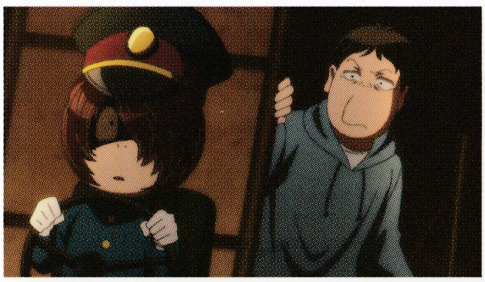
SNS中毒VS縄文人(じょうもんじん)

湊(みなと)クリスティーンはSNSの人気者。しかし、ねずみ男に連れられて都会にやって来た縄文人がその地位を脅かし始めた。焦った彼女は様々な手段で縄文人に勝とうとする。そんな彼女の行動は行き過ぎてしまい、社会問題にまで発展して……!?

演出：なかの★陽　脚本：市川十億衛門　作画監督：清山滋崇　美術：加藤 恵

第 68 話

極刑(きょっけい)！
地獄流し

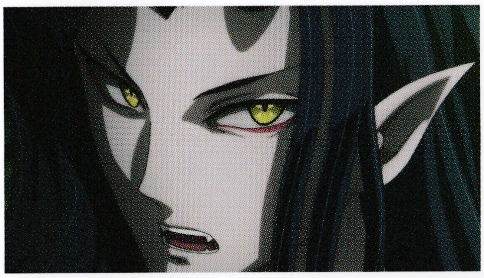


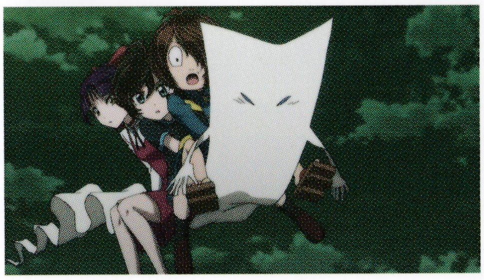


コンビニ強盗を起こしたカケルは、逃走する途中で不気味なバスに出会う。警察から逃れるためやむなくそれに乗り込んだカケルだったが、そのバスが行きついたのはこの世のものとは思えない不気味な場所だった。

演出：畑野森生　脚本：伊達さん　作画監督：袴田裕二　美術：加藤 恵

DISC





第 69 話

地獄の四将
鬼童伊吹丸

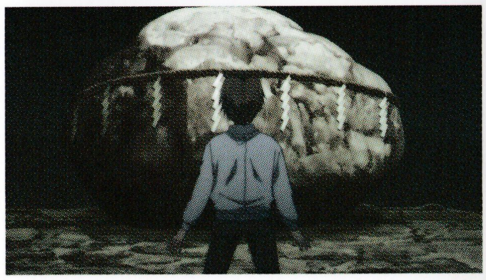
大逆の四将の一人、鬼童・伊吹丸がまなを連れ去ってしまい、捜索をする鬼太郎。しかし折り悪く依頼が舞い込んでくる。まなの件を一旦子泣きじじいたちに任せて依頼の場所に向かった鬼太郎だが、そこで伊吹丸の強襲に遭遇。さらに零までもが現れて……!?

演出：松實 航　絵コンテ：地岡公俊　脚本：吉野弘幸
作画監督：浅沼昭弘　美術：加藤 恵

第 70 話

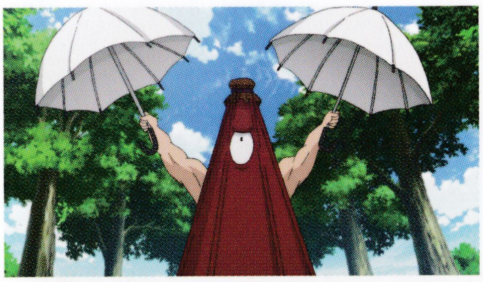
霊障
足跡の怪

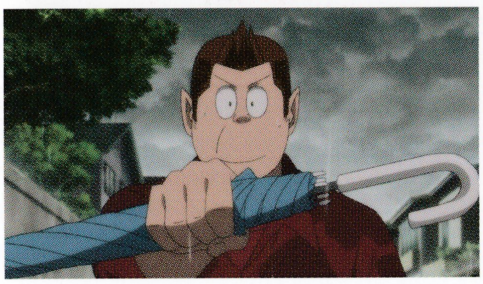




入らずの山の番人を務める阿形家に生まれた健人は、その役割から逃れるため御霊石を壊そうとするが、祟りを理由に父と鬼太郎に止められる。その夜、諦めずに石を破壊しようとする健人の前に再び現れた鬼太郎は、ある13年前の出来事を語り始める。

演出：角銅博之　脚本：長谷川圭一　作画監督：八島善孝　美術：加藤 恵





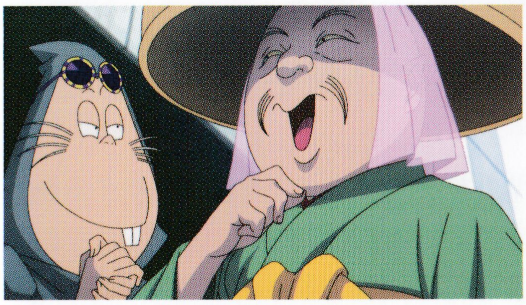
第 71 話

唐傘の傘わずらい

雨の日、唐傘は一人の青年がビニール傘を取り違え、その傘すらも途中で置き忘れてしまっているところを目撃した。その後も続く青年のぞんざいな傘の扱いに心を痛めた唐傘は、青年の性根を叩き直すためある作戦に出る。

演出：清水 明　絵コンテ：前島健一　脚本：伊達さん
作画監督：鈴木伸一　美術：加藤 恵

第 72 話　妖怪いやみの色ボケ大作戦

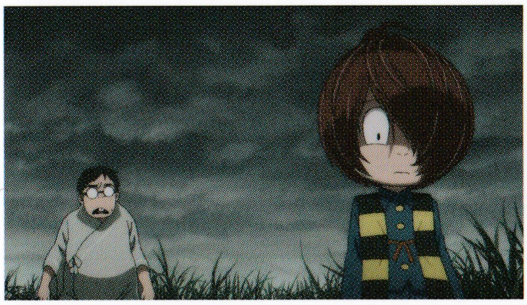


きのこ狩りに出かけた鬼太郎と子泣きじじい。そこに現れた妖怪・いやみが、二人に桃色の吐息を吹きかける。その後、みんなが集まる家へ帰ってきた鬼太郎は突然ねこ娘の手を取りデートに誘う。驚きつつそれに応じるねこ娘だが……!?

演出：野呂彩芳　絵コンテ：地岡公俊　脚本：井上亜樹子
作画監督：市川吉幸　美術：加藤 恵

第 73 話　欲望のヤマタノオロチ

自分の不幸を嘆き続ける斉藤は、「オグロ山のヤマタノオロチはどんな願いも8つ叶えてくれる」という噂を知り、オグロ山に向かう。すると、そこで出会った不気味な呼子からダイヤモンドを渡された。気付くとダイヤの中に閉じ込められていた斉藤は、巨大なヤマタノオロチと対面し……!?



演出：上田芳裕　脚本：大野木寛　作画監督：藤原未来夫　美術：加藤 恵

第 74 話　地獄崩壊!? 玉藻前(たまものまえ)の罠



閻魔大王から九尾の狐こと玉藻前の捕縛を催促された鬼太郎。そんな中、手紙の依頼をこなそうと出かけた子泣きじじいたちが姿を消してしまう。その一方、とある国の軍艦が日本に迫ってきていた。この事態の背後では、怪しく美しい女が糸を引いていて……!?

演出：虎田 功　脚本：吉野弘幸　作画監督：信実節子　美術：加藤 恵

第 75 話　九尾(きゅうび)の狐(きつね)

ついに、大逆の四将最後の一人である玉藻前と地獄であいまみえた鬼太郎だが、玉藻前は姿を消してしまう。そんな中、更なる力を欲した零が鬼太郎を取り込むべく襲い掛かる。果たして、鬼太郎は零を退け玉藻前を捕えることができるのか!?



演出：飛田 剛　絵コンテ：牧野次郎　脚本：吉野弘幸
作画監督：小泉 昇　美術：加藤 恵

ゲゲゲのお喋り 6



ゲゲゲの鬼太郎役
沢城みゆき

×



石動零役
神谷浩史

ゲゲゲのお喋り第6回目は、鬼太郎役の沢城みゆきさんと、石動零役の神谷浩史さん。激しく対立するキャラクターを演じたお2人から、お互いの役柄に対する想いや、『ゲゲゲの鬼太郎』ファミリーの驚きのエピソードが聞けました。仲の良さが伝わってくる、和気あいあいとした雰囲気で語っていただきました。

『鬼太郎』は"TVで観るもの"

――神谷さんは第6期2年目からのご出演となりましたが、ご出演が決まったときはどんな気持ちでしたか？

神谷浩史(以下、神)：不思議な感覚でしたね。マコさん(野沢雅子さん)が鬼太郎役をやっていた第2期の『鬼太郎』をTVで観ていたので、その印象がとても強くて。『鬼太郎』は"TVで観るもの"だと思っていたから、自分が出演するというのがピンときませんでした。僕がこの仕事を始めてから『鬼太郎』は3回目のアニメ化なので、過去2回、出演するチャンスはあったはずなんですけど、出られなかったことに対して何の疑問も感じていませんでした。

沢城みゆき(以下、沢)："TVで観るもの"という感覚だからね。



神：事務所の同期や後輩も出演していましたが、なぜか僕には声がかからず(笑)。でも今回、時が過ぎてやっとお声がけをいただきました。いざ出演することになっても、やっぱり『鬼太郎』は"TVで観るもの"という思いが強いから、とても不思議な感覚ですね。

石動零役ならではの苦悩！

――石動零というキャラクターを聞いたときの印象をお聞かせください。

神：とてもキャラが立っていて、『鬼太郎』に出てくるにはあまりふさわしくないというか、異質な存在だなという印象でしたね。実際に演じてみても、同じ印象でした。でも1回限りのゲストの妖怪ではなく、TVシリーズ2年目の重要人物を演じることができるのは、すごくうれしかったですね。

沢：私は神谷さんの出演が決まって「やったー！」でしたね。零は鬼太郎とガッツリからめる役どころでもあるので、うれしかったです。それに、鬼太郎を演じている沢城みゆきとしても、とても助かりました。基本的に神谷さん自身が緊張感を持って現場に切り込んできてくれるんです。だから周りも一定の緊張感を持って演じることができる。他の作品でも神谷さんが参加すると「果たして昨日までの自分は、精一杯やっていたか」と、みんなが自分自身に問いかけてると思います。

神：そんなことはないでしょう(笑)。

沢：私は神谷さんが来てくれると、勝手にギアが上がるんです。自分自身で気持ちを上げていくのって、すごく大変なんですよ。神谷さんが来

てくれると「神谷浩史を倒すぞ！」っていうエンジンが勝手にかかってくれる。私にとってもいいテコ入れになって、最高のテンションで２年目のスタートを切れましたね。
神：そういうふうに言っていただけると、すごくありがたいですね。みゆきも僕にとってギアの上がる存在だから、頑張んなきゃと思いました。

マコさんといると本当に楽しい！

――鬼太郎ファミリーの印象はいかがでしょうか？　アフレコ現場でのエピソードなどありましたらお願い致します。
神：目玉おやじに３行以上のセリフがあって、マコさんが「なんでおやじがこんなにいっぱいしゃべるのよ！」って愚痴っていたのは面白かったですね。弱音を吐いているベテランさんは見ていて楽しいです(笑)。
沢：目玉おやじが、状況を説明しなきゃいけないことが今期は多くて。
神：「おやじはこういう役じゃない」って言っていたけど、僕は「いや、そういう役だと思いますよ」と言っちゃいました。
沢：今までは「そうですよね」って、みんなで相槌を打っていたんですよ。でも神谷さんは来た途端に、「いやマコさん、そういう役ですよ」ってズバッと言っちゃった(笑)。マコさんにツッコミを入れたのは、神谷さんが初めてでしたね(笑)。
神：マコさんは事務所の先輩でもあるので、一緒にいると本当に楽しいんですよ(笑)。アフレコ終了後には、毎回、みんなを食事に連れて行ってくれるしね。
沢：誕生日が近い人がいればお祝いもするしね。
神：盛大に誕生日を祝ってもらっている皆さんの姿に、「こんなふうに誕生日を祝われたことないなあ」なんて思いながら孤独感を高めていました(笑)。『鬼太郎』は特にみなさん仲が良くって、ファミリー感がすごいんですよ。2年目にちょっと出てきた僕なんかが馴染めるわけがない(笑)。妙な孤独感があって、素直に楽しめなかったのが悔しいですね。
――野沢雅子さんとの共演はいかがでしたか？
神：すごくうれしかったです。マコさんとの共演は『デジモンセイバーズ』以来なので、10数年ぶりですね(『デジモンセイバーズ』(2006)で、神谷はクレニアムモン、野沢はデュークモンという同じロイヤルナイツを演じた)。



沢：お２人がこんなに仲が良いなんて、知りませんでした。マコさんといるときの神谷さんは、本当にうれしそうなんですよ。
神：マコさんとは現場ではあまり接点がなかったんだけど、ラジオ番組に出演していただいたのをきっかけに同じ美容院に通うことになったんです。同じ美容師さんが担当なんだけど、「昨日、マコさんがいらっしゃったんですよ」って報告してくれるから、僕も「そうなんですか、よろしくお伝えください」って言うようなことがずっと続いていて。40年後はきっと、僕もマコさんみたいな髪型にしてもらえるんだと思います(笑)。

思い出を語りだしたら止まらない！

――では、地獄の四将編を終えて、特に印象に残っているキャラクターや場面などがあればお教えください。
神：やっぱり伊吹丸ですね。
沢：伊吹丸はあの後ろ姿しか覚えていませんね。地獄に連行されていく間に、(古谷)徹さんいっぱい喋ってたじゃないですか(笑)。
神：ははははは(笑)。
沢：伊吹丸の話を聞いているときだけは、零と鬼太郎は同じ生き物になれたと思う(笑)。圧倒的な存在と圧倒的な結論の前に、ただただ畏怖(いふ)する。強烈なインパクトでしたね。

神：あの場面は面白かったね。徹さんはカッコ良い役ばかりやって、イカスなぁ、さすがっす。

沢：スターですよね。

神:カッコ良かったなぁ。全部、持っていかれたよね。

沢：本当に、あのときだけ違うアニメになっていた(笑)。

神：僕は役とリンクしている部分が強いから。卑屈になるのが加速するエピソードでしたね。鵺とか黒坊主は、倒すというより一方的に蹂躙する感じだったじゃないですか。鵺なんて上半身ムキムキのタンクトップのお兄さんが「どうだどうだ」って言いながら弓を引いて、全然カッコ良くなかったじゃん(笑)。

沢：すごく重たい弓なのよ。普通の人じゃどうやっても引けないのよ(笑)。

神：戦う時も猟奇的だし。監督ともお話をしたんですけど、零は強い役だから、戦う時はオーバーに声を出さないほうがいいんじゃないかと。「うおぉぉぉ！」って熱くなりすぎると、弱く見えちゃいますよね。でも監督は「やっちゃっていいです」ということだったので、戦うときは全力で声を出すということになったんです。だから戦うときの絵はすごくカッコ良く動いていますけど、声が必死過ぎて……。総合的に観るとそんなにカッコ良くないんですよね(笑)。だから伊吹丸とフュージョンしたときは気持ちが良かったですね。「うおぉぉぉ！」みたいな息のアドリブは必要なし！　余計な叫び声は全部消していくわけですよ。これだよなぁ、カッコ良い奴って。やっぱり伊吹丸がいないとダメなんだなって(笑)。やっとカッコ良くなれた気がしました。

沢：あれはカッコ良かった。

神：鬼太郎がやられそうになっているところに、サッと登場してね。

沢：あとは、ただただ大きな声で「うわぁぁぁ！」って叫んでいる鵺の(辻)親八さんは怖かったですね(笑)。

神：怖かったね(笑)。

沢：目一杯、全力で「うわぁぁぁ！」って叫ぶんですよ。なんか想像していたより遥かに叫ぶというエネルギーがすごくて怖かったですね。黒坊主は喚いたり小ずるかったりして、猟奇的に怖いことはなかったけど。千葉(繁)さんが演じられたことで「癖のあるやつが来た！」という感じに仕上がって、すごいなと思いました。



神：圧倒的な優位性でしか戦えないキャラクターだからね。自分の存在が別のところにあるにも関わらず、手を下せる。見抜いてしまえば怖くはないんだけど、見抜くまではとにかく怖い。

——では、その他で特に印象に残っている妖怪はいますか？

沢：私は1つ1つ思い出深いですね。2年目に入ってから、濃かったなぁ。

神：飛田(展男)さんは面白かったね。

沢：飛田さんの吸血鬼ラ・セーヌは、もう素晴らしすぎましたね。音声はオフで絵だけを見せるシーンがあったんですけど、飛田さんがアドリブで喋ったのがすべて採用されたんですよ。第57話「鮮血の貴公子 ラ・セーヌ」は、飛田さんもさることながら、ラ・セーヌの召使いのマンモス役のくじらさんもすごかった。お2人の掛け算で、素晴らしいお話になったと思います。第53話「自己愛暴発！ぬけ首危機一髪」には、HIKAKINさんがゲストで来てくださったり、第54話「泥田坊と命と大地」には黒須役で山路(和弘)さんが来てくださったり。

神：へぇ、山路さんも出演していたんだ。

沢：ものすごい大人のドラマだったんですよ。第55話「狒々のハラスメント地獄」は小野坂(昌也)さんが来てくれたので、別の意味で『鬼太郎』じゃないみたいだった(笑)。第56話「魅惑の旋律 吸血鬼エリート」には、吸血鬼エリート役で中尾(隆聖)さんが来てくださって。悲哀が強くて素敵なお話でした。第59話「女妖怪・後神との約束」は、(桑島)法子さんが来てくださったことにより、ジャパニーズホラーの金字塔になったと思いますね。第58話「半魚人のかまぼこ奇談」は鬼太郎がカマボコにもなりましたし……って、どの回も印象深くて、ずっと喋り続けられますね(笑)。

神：すごいね(笑)。

沢：第60話「漆黒の冷気 妖怪ぶるぶる」は脚本の伊達さんのお母様である堀越(真己)さんが妖怪ぶるぶる役で来てくださって。親子の共同作業に現場が盛り上がりましたね。と、ほかにもお話したいことがいっぱいありすぎるので割愛しますけど、２年目も濃すぎました。

零がゲゲゲの森に遊びに行く!?

──神谷さんは、もし妖怪ポストがあったら、どんなことをお願いしたいですか？

神：鬼太郎たちがその願いを叶えるために頑張るわけでしょ？　役柄的に僕は「あいつら、なにもできねぇ」と思っているわけだから、彼らに頼むことはないかな(笑)。

沢：じゃあ、ゲゲゲの森に遊びに来てよ。お茶くらい出すから(笑)。もろこし茶とかひげ茶とか、何種類かあるみたいだから。

神：ゲゲゲの森には、ちょっと遊びに行きたいね。ちゃんと帰れることを保証してくれれば(笑)。

沢：身の安全は保証するから、日程調整しましょう。空いているスケジュールを書いてポストに入れてもらえれば(笑)。

BOX６を購入してくれたみなさんに！

沢：『鬼太郎』をお手元に置いていただき、本当にありがとうございます。大変だった地獄の四将編が終わって、ここからさらにもうひと頑張りです。引き続き、一緒に楽しんでいただけると心強いです。これからもよろしくお願いいたします。

神：みゆきが鬼太郎を演じて、僕が大好きだった『鬼太郎』をやっていたマコさんが目玉おやじを演じているという、最強布陣の『鬼太郎』に関わることができて、本当に心からうれしく思います。そんな最強の『鬼太郎』が形になったBlu-ray、DVDをお買い上げいただいたみなさまには、心から感謝しています。末永く大切にしてくれるとうれしいです。僕も大切にします！





沢城みゆき

東京都出身。青二プロダクション所属。
代表作は『ルパン三世』峰不二子役(三代目)、『HUNTER×HUNTER』クラピカ役、『Go! プリンセスプリキュア』キュアスカーレット役、『報道ステーション』ナレーションなど。



神谷浩史

千葉県出身。青二プロダクション所属。
代表作は『進撃の巨人』リヴァイ役、『ONE PIECE』トラファルガー・ロー役、『夏目友人帳』シリーズ 夏目貴志役、『斉木楠雄のΨ難』斉木楠雄役、『クレヨンしんちゃん』ぶりぶりざえもん役(二代目)など。

永富×小川の

ゲゲゲの部屋



永富プロデューサーと、シリーズディレクターである小川監督がスタッフを招いて語る、毎回発見や驚きがいっぱいのコーナー。6回目のゲストは、編集を担当する吉田公紀さんと、録音・ダビングを担当する松田悟さん。お2人はそれぞれ、どんなお仕事を担当しているのか、まずはお伺いしていきましょう。


プロデューサー
永富大地

×


シリーズディレクター
小川孝治

×


編集
吉田公紀

×


録音・ダビング
松田悟

編集の仕事は1人で完結する!?

――最初に、今回お招きしたお2人のお仕事からお伺いしたいです。まず吉田さんのご担当である編集とはどんなお仕事なのでしょう？

吉田公紀（以下、吉）：アニメーションの編集は、簡単に言うと、1カットごとにできあがってきた映像を繋げて、決められた尺にしていく仕事です。『ゲゲゲの鬼太郎』で言うと、本編の尺は約20分になります。

――まず、どこから仕事は始まるのですか？

吉：声優さんたちの収録の1週間前に、まず尺にあわせた映像を作ります。動画や原画があがっていない部分は、絵コンテを使って、どのキャラがどこでしゃべっているのかのガイドもつけます。



永富大地（以下、永）：本当はそこで、ちゃんと映像ができあがっているのが理想なんですよ。でも『鬼太郎』でも、時々、絵コンテ撮でアフレコなんてこともあります。いいわけじゃないですけど、『鬼太郎』はシナリオも、監督、演出家もこだわってるので遅れがちで……。

小川孝治（以下、小）：皆さんこだわっていますからね。それで、遅れることはあります。

永：でも、小川監督の演出回のコンテは絶対遅れないんですよ。それだけは、小川監督のために言っておきます！

小：（笑）。

吉：（笑）。そこからは、新しいカットがあがってくるたびに、編集した映像にはめ込んでいって、1本完成させる、そういうお仕事です。繋いだ時に放送の尺より長い時は、せっかく描いていただいた画を泣く泣くカットすることもありますね。それに短い時はどこかのシーンを伸ばしたり……。先日も境港の魔猫の回（第65話「建国!?魔猫の大鳥取帝国」）で尺が足りず、小川監督にどこを伸ばしましょうと相談したら「セミ！」と即答でした（笑）。

永：監督はああいうシーン好きだし、尺取りますよね。

小：いやぁ（笑）。

録音・ダビングの仕事はバランス勝負!?

――では松田さんが担当されている録音、ダビングはどのようなお仕事なのでしょう？

松田悟（以下、松）：まず録音は、声優さんが収録をするときにその音声を調整する仕事です。声優さんによって、声の大きさにバラつきがあるので、

そのバランスを調整していきます。『鬼太郎』の収録スタジオには、マイクが４本あるのですが、どの声優さんがどのマイクを使うか決まっていないんです。お話の流れ、シーンによって、どこを使うか変わるので、それに合わせて対応していきます。
永：それをすべてリアルタイムで調整していくんですから、本当にプロの仕事ですよ。
松：収録の間ずっと集中しているので、１本録るともう精魂尽き果てていますね。
——ダビングの仕事は、そのあとになるのでしょうか？
松：そうですね。収録した音声、SE（効果音）、音楽を映像に合わせていく仕事です。その３つのバランスを、シーンごとにどういうボリュームにしていくか調整していきます。なにも考えずにただ合わせただけだと、いわば居酒屋みたいな状態で、どれを聞いたらいいのかわからない非常に散漫なものになるんです。
永：視聴者のみなさんは、あまり意識していないかもしれませんが、ダビングの仕事はアニメにとって非常に大事なものです。
小：ダビングによって、作品が最終的にどうなるか、決まってきますからね。
松：このシーンはキャラのセリフを聞かせる、このシーンは音楽を聞かせるとかちゃんとシーンごとに決めていきます。そのバランスを決めて、最終的な音が決まっていきます。

永富Ｐの希望で集まった２人

——永富さんが、このお２人に『鬼太郎』の仕事を頼んだ理由は？
永：吉田さんとは、僕がプロデューサーを担当した『映画プリキュアオールスターズ NewStage3 永遠のともだち』で編集助手として参加してもらってからの縁です。そこから、信頼できる編集さんだと思っていたので、今回お願いしました。
吉：僕は第５期のシリーズと『劇場版ゲゲゲの鬼太郎 日本爆裂!!』で編集助手として参加したので、第６期に参加できたのは運命だと思っています。
永：とにかく飲みの場にもよく来てくれるんですよ。出席率高いです。
吉：え!?　そこですか（笑）。永富さんは宴会部長ですもんね。



永：（笑）。いや、宴会プロデューサーです（笑）。飲みの場に参加するというのは非常に大事な仕事でして。編集のお仕事って、究極で言うとモニターの前で、１人で作業しちゃうお仕事なんですよ。でも吉田さんは、アニメーターさんやほかの部署の人とも非常によくコミュニケーションをとっていらっしゃる。収録にもよく顔を出してくれますし。
吉：いろいろなパートの人とコミュニケーションを取ることで、それぞれ考えていらっしゃることも理解できますし、より良い作品ができるのではないかと思っています。
——なるほど、では松田さんは？
永：松田さんもずっと前から仕事をさせていただいているんですよ。『ワールドトリガー』も『デジモンユニバース アプリモンスターズ』もお願いしました。非常に信頼をさせていただいているので、『鬼太郎』もお願いしたいと僕から頼みました。声優のオーディションにも立ち会ってもらったんです。
——オーディションに参加することはよくあるんですか？
松：いや、ほかの作品ではないですね。
永：やはり松田さんは音のプロですから、参加し

てもらいました。我々が聞くとまったく別の声に聴こえても、声優さん同士で音圧や音質がかぶっていたりすることがあるらしいんですよ。そこを松田さんに判断してもらいました。
──お２人はいろいろな作品に参加されていると思いますが、『鬼太郎』ならではの、特殊な部分はあるのでしょうか？
吉：鬼太郎は１話１話、単発のお話なうえにテイストも違うので、話の傾向ごとに編集の方向性も変えていますね。それは、連続したストーリーのアニメとは違う部分ですね。怖い回はやはり間が重要だと思っています。間がないと、視聴者を怖がらせることはできません。逆にギャグ回はテンポが重要ですね。ポンポンポンッと、テンポよく繋いでいきます。BOX6なら境港の魔猫の回とか、いやみの回（第72話「妖怪いやみの色ボケ大作戦」）とかですね。
永：魔猫の回は、小川監督絵コンテ担当で、渾身の回ですからね！
小：そうですね。今年も境港編をやるとなったら自分でやりたかったので。
吉：小川監督も永富さんも、非常にやりたいことが明確なので仕事がしやすいんですよ。
──では、松田さんは『鬼太郎』ならではのところというのはありますか？
松：僕は、常にいつも変わらずに仕事しようと思っています。どの作品でも、『鬼太郎』でも、録音とダビングは常に冷静に、変わらずにやるスタンスです。客観的に、冷静な目を持っていないとやれない仕事だと思っていますね。
永：そういうところが、松田さんの信頼できる部分です。
松：でもやはり、野沢雅子さんの『鬼太郎』世代なので、収録は緊張して臨んでいます。それに６期





の『鬼太郎』は第１話を観て、小川監督は天才だなと、頭の中を覗いてみたいと思いました。
小：!?　ありがとうございます！
松：だからこちらも、全力で仕事をさせていただいています。これまでの中では、すねこすりの回（第６話「厄運のすねこすり」）は、かなり大好きですね。猫を飼っているので、もうたまらないお話でした。悲しいシーンというのは、音楽によって泣けるか泣けないかが決まってくると思っています。あの回のクライマックスシーンの音楽は、かなりボリューム調整にこだわったので、そこに注目して観て欲しいですね。

聞いておきたい「地獄の四将編」の理由

──永富Ｐに「地獄の四将編」は、どのような経緯で作られたのか、ここで聞いておきたいと思います。
永：守りに入らず攻めたかったですし、２年目は１年目のコピーにはしたくなかった。なので、鬼道衆という原作にある設定から、石動零という原作にないキャラを入れることによって、完成されつつあった第６期『鬼太郎』に異物感を与えたかったんです。それはスタッフやキャストに対して、新しいチャレンジをするよというメッセージでもありました。石動零役の神谷浩史さんは、鬼太郎

役の沢城さん曰く「みんなに緊張感を与える男」ですからね(笑)。神谷さんに入っていただいたことで、現場がすごく引き締まりました。関係者にも視聴者にも、新しいことが始まるというメッセージを伝えることができたと思います。「地獄の四将編」は、シナリオも１人のライターさんに書いていただきました。同じ方が書いたほうが、物語に一貫性があって、縦の線の純粋度が高くなるんです。BOX6で、そのあたりも意識して見ていただけるとさらに楽しめると思います。

第６期『鬼太郎』の裏の目的？

――では、最後にBOX6をお買い上げいただいたみなさんにメッセージをお願いします！

松：BOX6で、いろいろな物語を楽しんでいただきたいです。これからもまだまだ、いろんな妖怪が出てきますので、それに合った音作りをしていきたいと思います。

吉：ここまであっという間でしたね。

小：まだ終わっていませんよ(笑)。

吉：僕は、続くならいくらでも第６期『鬼太郎』を続けたいです。第６期はかなりドラマ性があったので、自分の中でも気に入っているんです。自分の中では『鬼太郎』といえば第６期になっていますからね。目玉おやじといえば、もう野沢雅子さんの声で脳内再生されますから。お買いいただいたみなさんには、何度でも観ていただければと思います。

小：BOX６は第65話「建国!? 魔猫の大鳥取帝国」を観て、ぜひ境港に行ってほしいですね。鳥取に、ウェルカニ〜〜！！(笑)。

永：まなの叔父の庄司さんは、水木しげる記念館の館長さんがモデルになっているんですよ。『鬼太郎』のロケハンに行った時に、庄司館長と監督がすごく仲良くなって、アニメにも出ていただくことになったんです。１年目だけでなく２年目にも登場して、カニ鉄砲をぶっ放したりして(笑)。『鬼太郎』の影響もあって、庄司館長は大人気になっていますからね。

小：第６期の裏の目的は、調布や境港を盛り上げるのもありますからね。

永：境港にある水木しげるロードの最高動員記録を更新したいですよね。ロードそのものもリニューアルされてますし相乗効果で、某ドラマでブームになった時の記録を塗り替えてみせます！BOX6をお買い上げいただいたみなさんも、是非境港に行きましょう！

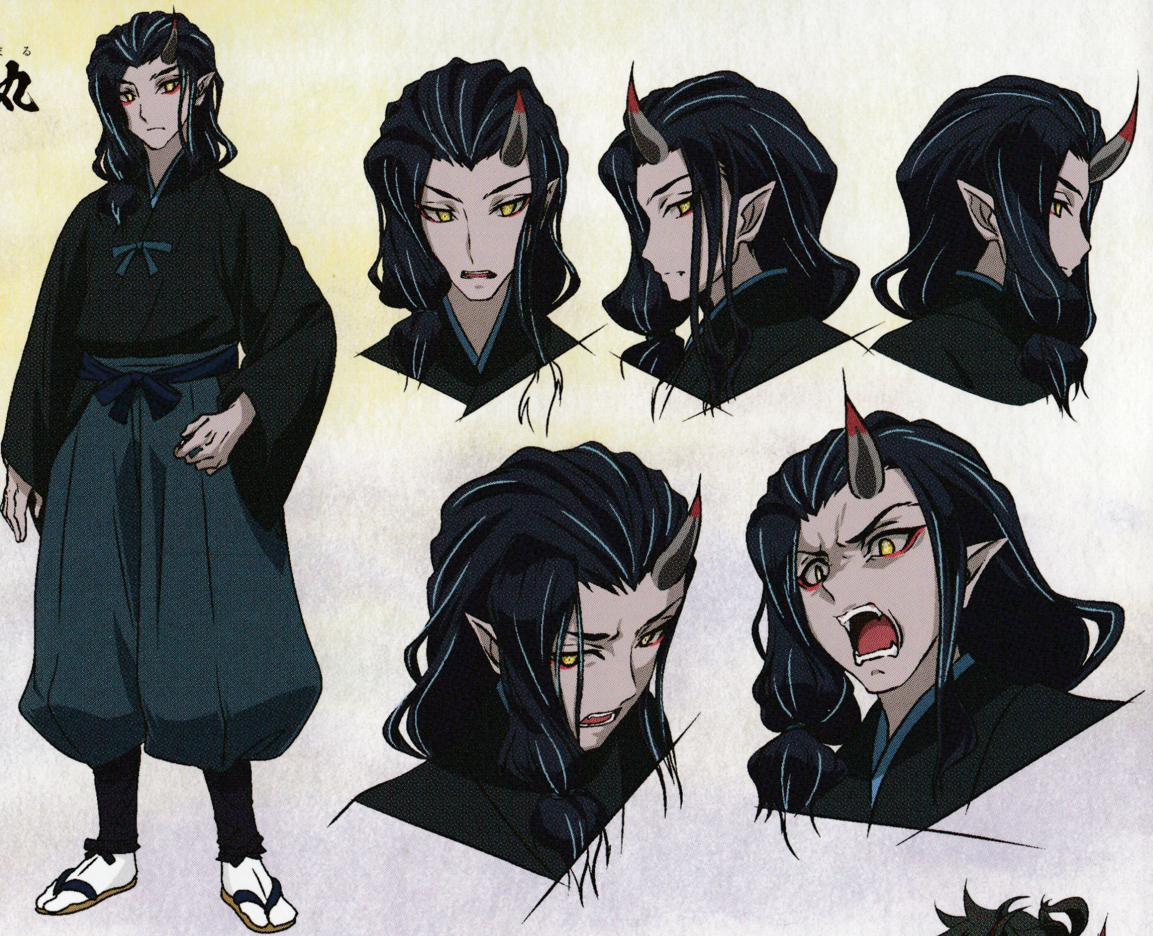


キャラクター紹介

鬼童（きどう）・伊吹丸（いぶきまる）

大逆の四将の一人で、酒呑（しゅてん）童子（どうじ）の息子。美しい風貌とは裏腹に、鬼の中でも最強クラスの力を持つという。





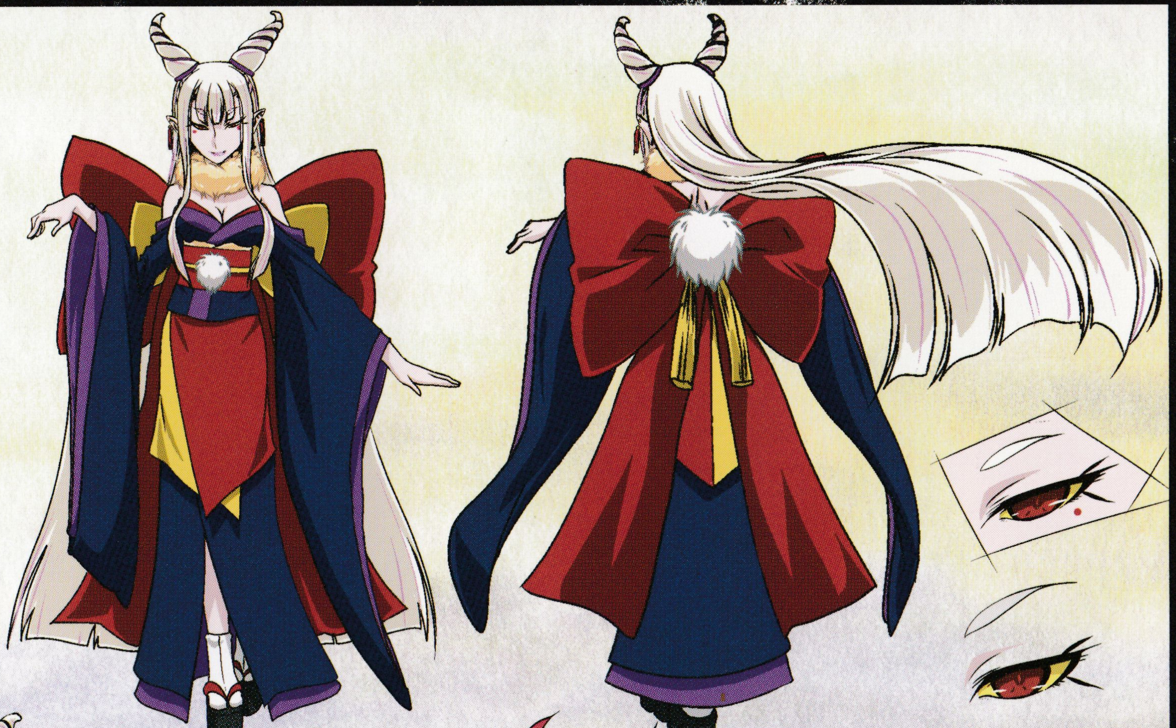
伊吹丸の魂と石動零（いするぎれい）が融合した姿

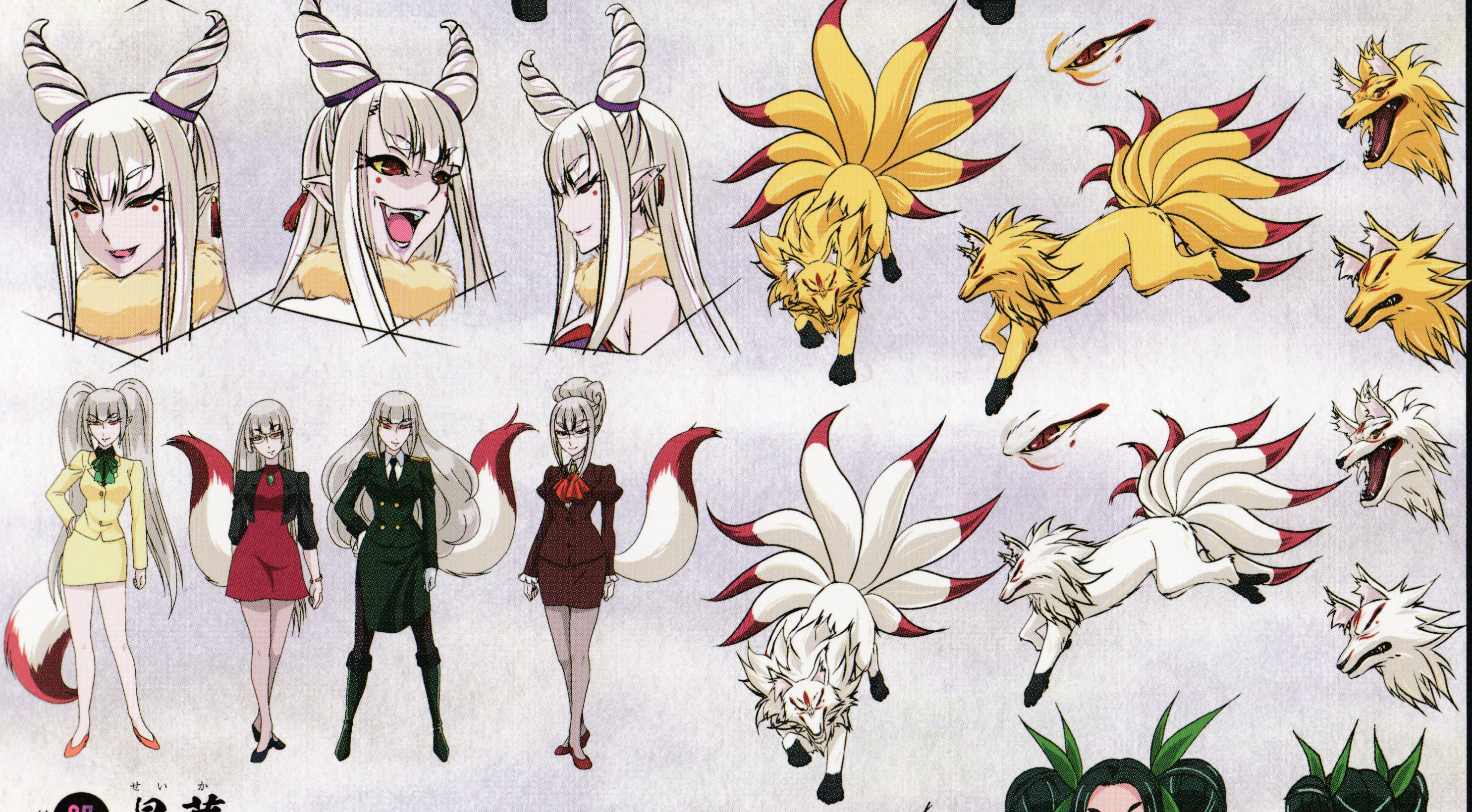




玉藻前（たまものまえ）

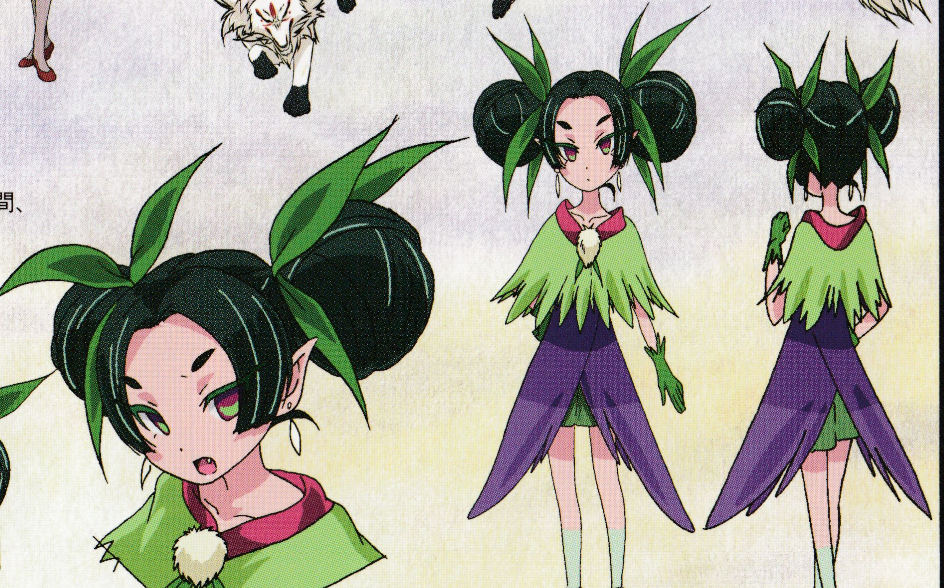
大逆の四将の１人で、九本の尾を持つ狐の妖怪。平安の世に美しい女官に化け、様々な王を唆（そそのか）してきたと言われている。





#63 星華（せいか）

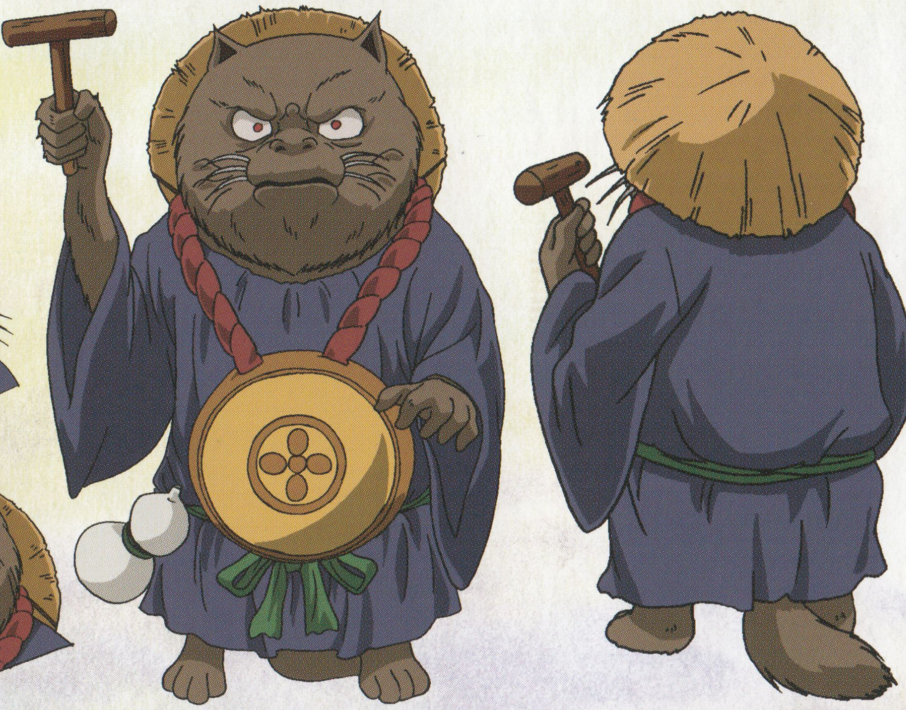
緑色のお団子頭をした笹の精。笹の花の咲く間、夏の短い時間しかこの世にいられない。

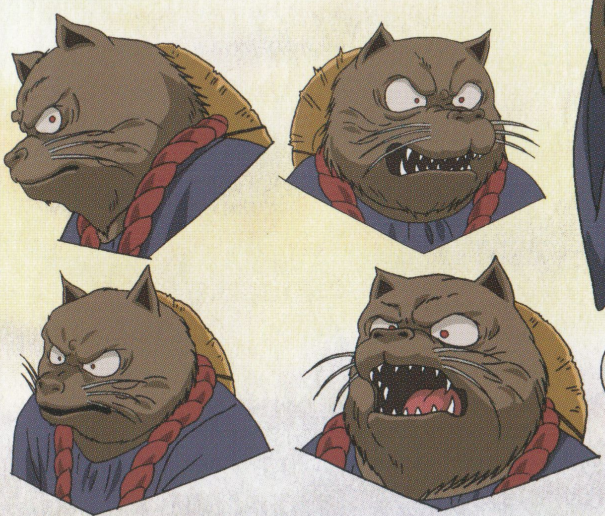




#63 あしまがり

首から太鼓を下げた狸のような姿をした妖怪。
人間を襲うのが好きな残忍な性格をしている。





#64 水虎（すいこ）

水の身体を持つ妖怪。人間の負の感情を反映し虎の姿になるといわれている。







#65 魔猫（まびょう）

猫の姿をした妖怪。ある強い想いからよからぬ計画を立て、実行に及んでしまっている。







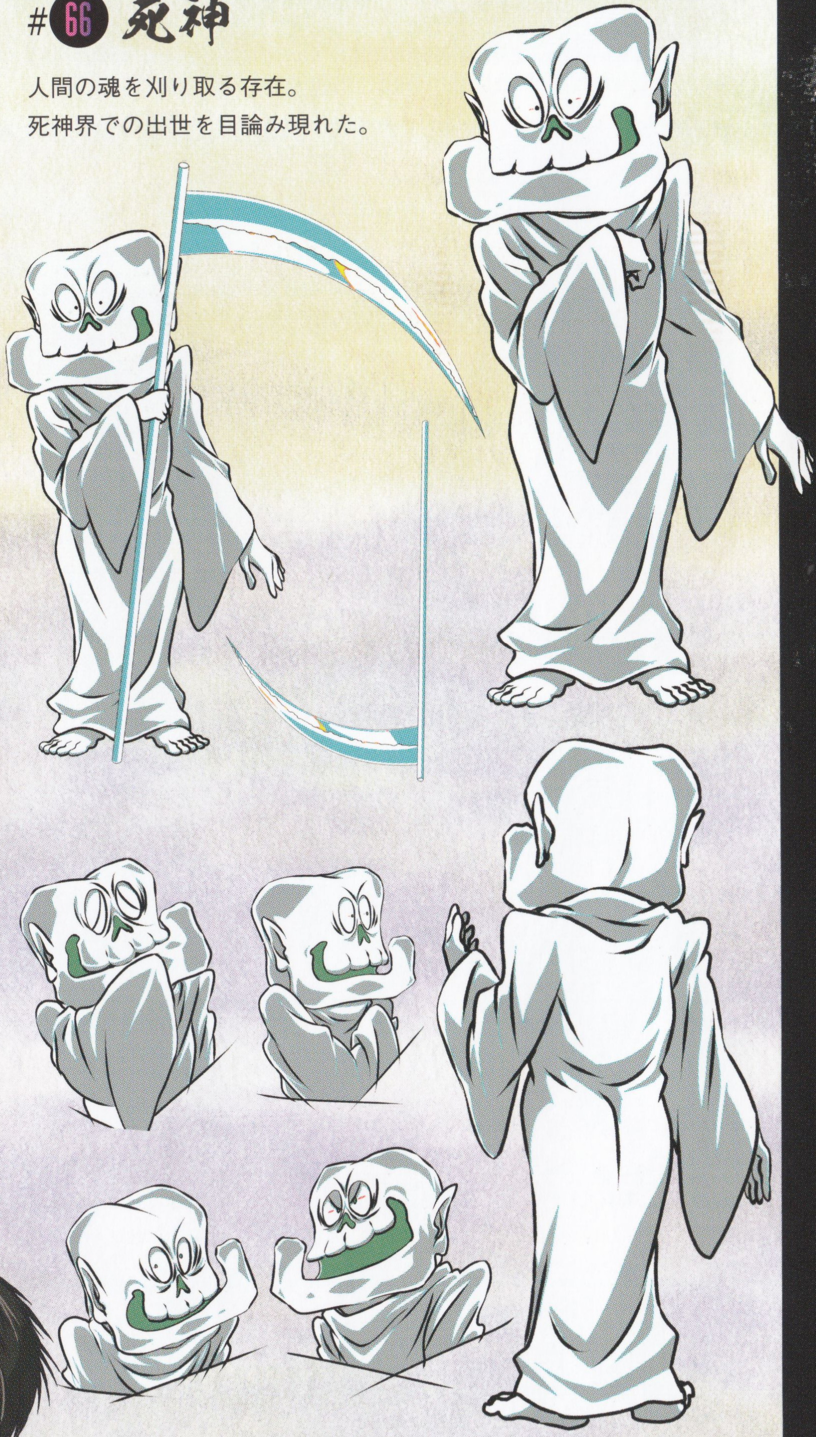
#66 人面樹

隠れ里に生えている大木で、
まなを呼び寄せた不思議な声の主。



#66 死神

人間の魂を刈り取る存在。
死神界での出世を目論み現れた。



#67 縄文人

山奥でひっそりと暮らしていたはずだったが、都会の街におりてきてからは世間の注目を集める。



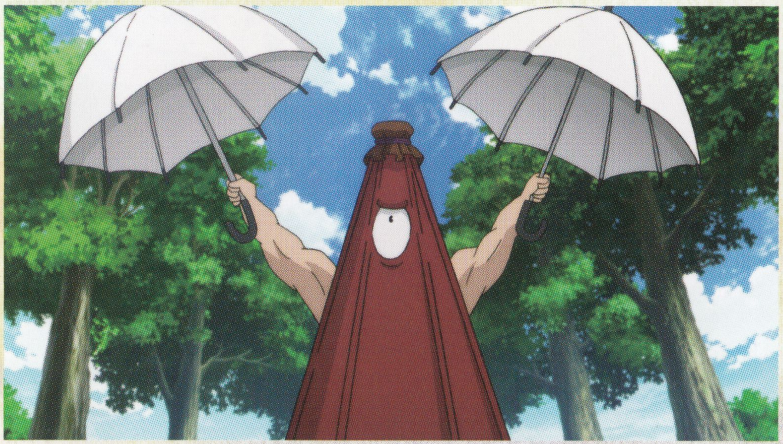
#68 土蜘蛛

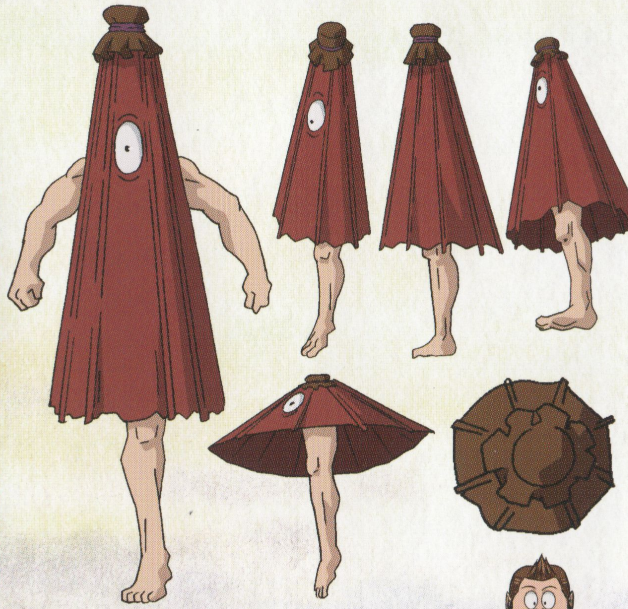
巨大な蜘蛛の妖怪。強靭な脚をもち、巨体に似合わぬスピードで移動する。



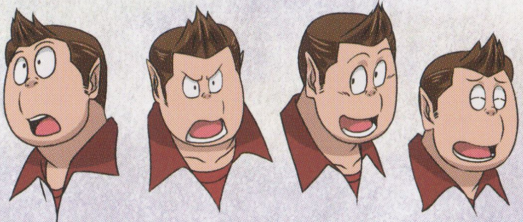
#71 唐傘（からかさ）

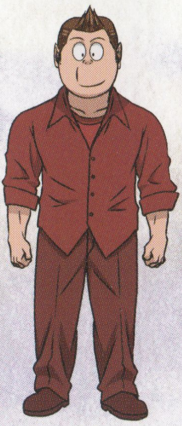
一つ目に一本足の傘の妖怪。現代の綺麗な傘にあこがれている。





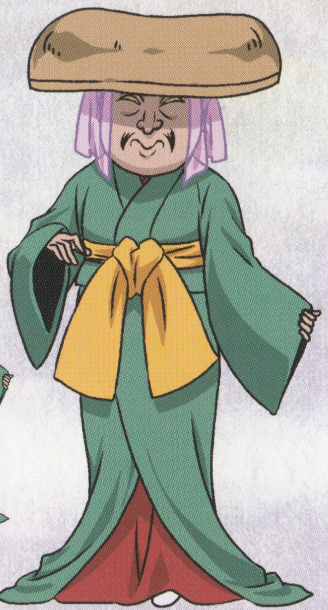
傘の大切さをわかってもらおうと、
鬼太郎のちゃんちゃんこを盗んで傘男に化けた姿。

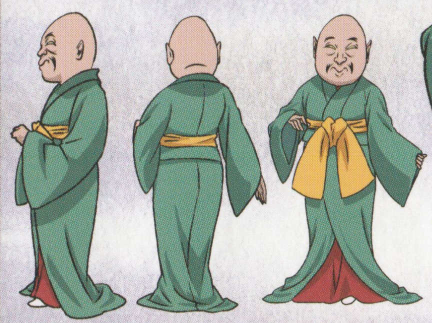


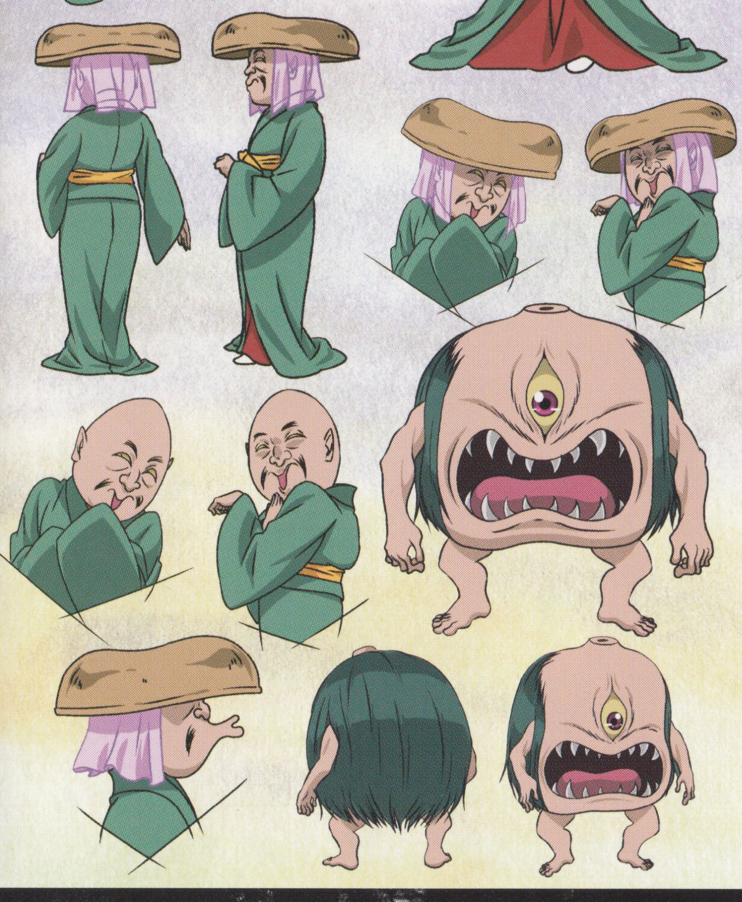


#72 いやみ

オネエ言葉で話す和装の妖怪。吹きかけられた息を吸った者は色ボケになってしまう。



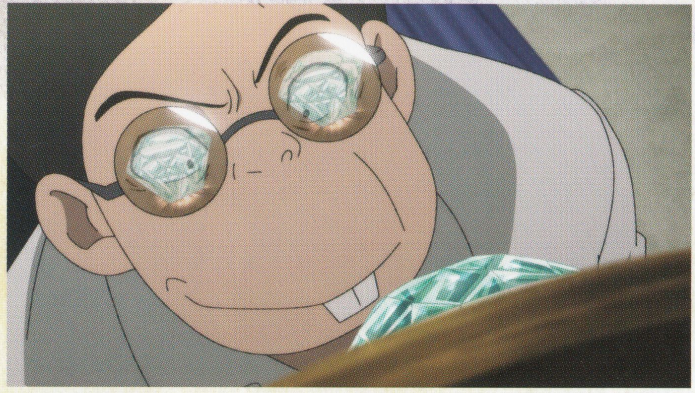




#73 ヤマタノオロチ

オグロ山に住む妖怪。
どんな願いでも８個叶えてくれるという。

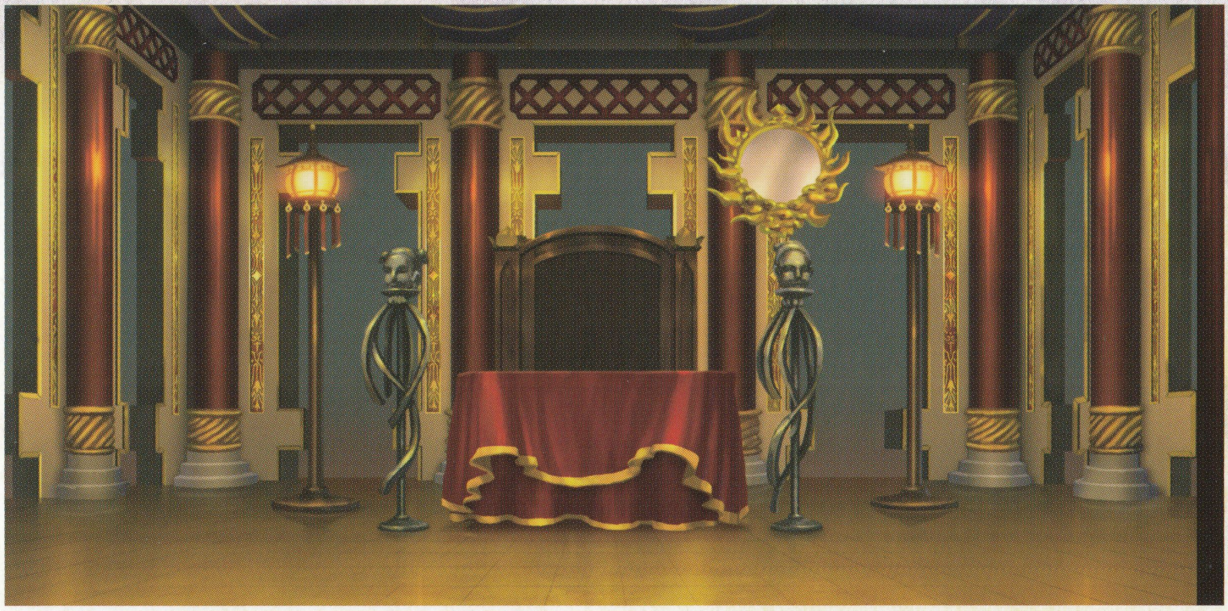




斉藤は巨大なダイヤモンドの中に閉じ込められ、
ヤマタノオロチと対面する。









BIXA-9066/BIBA-9076

デザイン：バナナグローブスタジオ